

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

植民地期朝鮮の日本人研究者についての評価

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2017-06-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 朝倉, 敏夫 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/4561

植民地期朝鮮の 日本人研究者についての評価



赤松智城（左）と秋葉隆。（提供：東亜大学教授・崔吉城先生）

研究者の評価は、どのように決まるのだろうか？ 日本人類学史における植民地期朝鮮の研究者たち4人に対する研究評価を比較して、そんなことを思ってしまった。

教授と官吏

京城帝国大学に赴任した赤松智城と秋葉隆、朝鮮総督府に赴任した村山智順と善生永助、彼ら4人は、生没年が善生は1885年から1972年、赤松は1886年から1960年、秋葉は1888年から1954年、村山は1891年から1968年と、ほぼ同時代を生き、同時期に朝鮮の社会と文化を研究した。また、赤松と秋葉は欧米留学の経歴を有し、秋葉と村山は東京帝国大学社会学専修の先輩・後輩であり、赤松と村山は僧籍にあったという共通点も有している。

彼らの先輩にあたる今村軻の古希を祝う「七旬祝賀宴」の席での2葉の写真がある（全2005）。宋錫夏、孫晋泰、金斗憲という朝鮮人研究者とともに、赤松、秋葉、村山が今村軻を囲んでおり、1枚は正装した記念写真、もう1枚は上着を脱いで、酒宴の最中に撮ったものである。互いに親睦関係にあったことを示している。しかし、そうした彼ら4人に対する評価には、これまでずいぶんと偏向がみ

られた。

総督府による研究の否定と軽視

戦後の韓国においては、植民地期の日本人研究者による研究に対しては、その研究目的が日本の植民地政策のためにあり、研究方法が官憲によるものであったと批判・否定されてきた。例えば、『韓国民俗学史』で印権煥は、「彼らの資料収集やその研究はどこまでも統治資料を得ようという政治的目的があり、そのうえ非科学的な間接調査によるものであり、学者の研究といっても周辺の低級文化民族についての民族学的考察がその主目的であったので、これを韓国民俗学の主流に含めることはできない」と述べている（印1978）。

ことに村山は、韓国のシャマニズム研究の重鎮である金泰坤に、『朝鮮総督府嘱託』ということのほかに、彼についての人的事項（経歴）がいまだ公式的に知られておらず、彼がどのような過程を経てこの地位にいるようになったのか、また彼がどのような秘密身分をもってこの仕事をしていったのか知るべき道がない」と等閑に付されている（金1971）。

一方日本においても、近年まで村山の経歴は知られていなかった。『文化人類学辞典』（弘文堂、1987年）には、「生没年不詳。当時その前歴は警察署長であったという風聞があるだけで経歴は不明」とある。その反面、京城帝大教授を経て、戦後も学界の中心的な役割を果たしてきた秋葉にのみ、もっぱら光があてられた。日本民族学会編『日本民族学の回顧と展望』（日本民族学協会、1966年）には、「朝鮮の宗教民族学的・社会人類学的研究は京城帝国大学法文学部における秋葉隆の赴任によって、他方には、そのころ新進の宗教民族学者であると同時にデュルケミアンの赤松智城との結びつきによる共同研究の発足によって始まった」と秋葉中心に記述されるとともに、年齢だけでなく帝国大学の職級において秋葉よりも上だった赤松を「新進」と評している。

また、文芸評論家の川村湊は、「それまでの今村軻や村山智順のような“素人”学者とは違った、学問的な理論、方法論を朝鮮の民俗学の世界に持ち込んだ」、「彼は村山智順のような警察や官庁に頼る調査研究ではなく、実際に現場へ赴き」などと、秋葉の業績を朝鮮総督府の研究と対比的にとらえて賞賛している（川村1996）。

朝倉敏夫 文

あさくらとしお

専門は韓国社会論
共編著書に、『グローバル化と韓国社会：その内と外』（国立民族学博物館調査報告69 2007年）、『変貌する韓国社会：1970-80年代の人類学調査の現場から』（第一書房1998年）など

日本人植民地研究の再評価

しかし、こうした誤解や不当な評価が、近年の研究によって見なおされてきた。その嚆矢となったのが、共同研究「日本人類学史の研究」のメンバーでもある崔吉城の研究である。崔は、1988年から巨文島における植民地期からの文化変容を共同調査し『日帝時代一漁村の文化変容』（ソウル：亜細亜文化社、1992年）をまとめるとともに、『日本植民地と文化変容』では植民地期の日本人研究者の研究・調査について概観し、「これらの資料は使用せざるを得ないと思う。（……）この資料はたとえ朝鮮総督府の調査であっても、初めてわが民族に対する行政の力によって行われた大規模な調査であったことに意義がある」と肯定的な評価を下している（崔1994）。

これらの資料を「あくまでも植民地侵略主義の侵略的要素を持った資料であることを認め、そうした統治イデオロギーと切り離して韓国民俗学の基礎資料として資料化することが可能だ」（崔2000）とする崔の主張に対して、金成禮や南根祐は反論を呈しているが、韓国国立民俗博物館による宋錫夏、韓国歴史民俗学会による孫晋泰など、韓国でも植民地期における韓国人研究者の研究が進むなかで、当時の日本人研究者についての研究も併行しておこなわれるようになってきている。そして、4人の研究者それぞれについても、ようやく日韓両国の研究者によって本格的に調査・研究されはじめていく。

秋葉については、崔吉城が資料批判をとおして、その学問と植民地観を分析するとともに（崔2000）、秋葉が植民地主義とアカデミズムの間でどのように対応したか、特に戦争期において植民地主義と民族学の関係をどのように考え、どのように行動したかを価値中立的に考察している（崔2002）。

赤松については、全京秀が朝鮮研究の主演をなした秋葉との比較をとおし「主演よりも引き立つ助演」（全2005）としての赤松の存在、「宗教民族学者」である宇野円空などと対比して「宗教人類学者」（全2008）であった赤松の学問について論じている。また、菊地暁は秋葉などの検証に比べて「取り残された感がある」赤松の業績の再評価をしている（菊地2007）。

村山については、朝倉がそれまで知られていなかった村山の経歴を明らかにし（朝倉1997）、未刊行であった村山智順の『朝鮮場市の研究』を世に出し、その「解題」（朝倉1999）を書いたのに続き、民俗学者である野村伸一が村山智順所蔵写真選を公開し、「村山智順論」を論述している（野村2001）。また、青野正明が村山の手による『朝鮮の類似宗教』、『部落祭』、『朝鮮の巫覡』、『朝鮮の占トと予言』を資料批判した論考をだしている（青野1995, 1996a, 1996b, 2008）。

善生については、林慶澤が善生の調査報告書のなかで、もっとも中心となっている『朝鮮の聚落』に焦点を当てて、生活状態調査や部落調査と植民地統治との関係についての考察をおこなっている（林2006）。

けっきょく、研究者の評価は後学にまかせられる。では、なぜ後学は先学を評価、すなわち学史を学ぶのか。『韓国人類学の百年』をまとめた全京秀は、「歴史を学ぶ姿勢は基本的に自省を目標にしている」という（全2004）。つまり、学史を論じるというのは、過去を顧みること、現在の座標を認識し、未来を指向するための方向を探るといった、自己を位置づける過程なのである。

参考文献

- 青野正明1995『朝鮮総督府の対民衆宗教政策』『聖和大学論集』23：189-202。
- 1996a『朝鮮総督府の神社政策』『朝鮮学報』160：89-132。
- 1996b『朝鮮総督府の対巫俗政策』『聖和大学論集』25：65-75。
- 2008『朝鮮総督府による朝鮮の『予言』調査』『桃山学院大学総合研究所紀要』33(3)：129-142。
- 朝倉敏夫1997『村山智順師の謎』『民博通信』79：104-111。
- 1999「解題」村山智順『朝鮮の場市研究』国書刊行会。
- 川村湊1996『「大東亜民俗学」の虚実』講談社。
- 菊地暁2007『赤松智城ノオト—徳応寺所蔵資料を中心に』『人文学報』94：1-35。
- 崔吉城1994『日本植民地と文化変容：韓国・巨文島』御茶の水書房。
- 2000『日帝植民地時代と朝鮮民俗学』中生勝美編『植民地人類学の展望』風響社。
- 2002『植民地朝鮮の民族学・民俗学』『世界の日本研究2002 日本統治下の朝鮮：研究の現状と課題』国際日本文化研究センター。
- 全京秀2004『韓国人類学の百年』風響社。
- 2005「赤松智城の学問世界に関する一考察：京城帝国大学を中心に」『韓国朝鮮社会の文化と社会』4：156-192。
- 2008『「宗教人類学」と『宗教民族学』の成立過程—赤松智城の学史的意義についての比較検討』『季刊日本思想史』72：107-129。
- 野村伸一2001「特集 村山智順が見た朝鮮民俗」『自然と文化』66。
- 林慶澤2006『植民地朝鮮における日本人の村落調査と村落社会—朝鮮総督府嘱託善生永助を中心に』『韓国朝鮮の文化と社会』5：167-202。
- 印権煥1978『韓国民俗学史』悦話堂（韓国語）。
- 金泰坤1971『日帝が実施した朝鮮民間信仰資料の問題点』『石宙善教授回甲記念民俗学論叢』269-283（韓国語）。

「今村鞆翁七旬祝賀宴」の席での2葉の記念写真。（提供：ソウル大学名誉教授・李文雄先生）

